

# グリーン四国

No.1209  
2020年  
12月号

## 令和2年度林業成長産業化構想 技術者育成研修開催

【詳細は2頁】



瓶ヶ森

### 目次

・令和2年度林業成長産業化構想 技術者育成研修開催	2
・令和2年度技術力維持・向上対策研修を開催	3
・天然力を活用した針広混交林化施業に係る意見交換会の概要	4
・令和2年度国有林野等所在市町村長有志協議会の開催	5
・シカ防護柵点検業務委託を実施	6
・愛媛大学リカレントプログラム（山地災害防止論）で治山事業を説明	7
・「令和2年度生産性向上勉強会」を開催	7
・各署等のたより	8
・【現場からの便り】紅葉ばえる別府峡より	12



四国山の日

## 四国森林管理局

高知市丸ノ内1丁目3-30  
TEL 088-821-2052  
FAX 088-821-4834  
HP <http://www.rinya.maff.go.jp/shikoku/>  
E-mail [shikoku\\_soumu@maff.go.jp](mailto:shikoku_soumu@maff.go.jp)

## 令和2年度

## 林業成長産業化構想技術者育成研修開催

〈森林技術・支援センター〉

令和2年度林業成長産業化構想技術者育成研修の四国ブロック研修が10月13日～16日の4日間の日程で開催されました。

受講生は兵庫県・愛媛県4名、民間林業事業体2名、国有林6名の合計12名が受講しました。

この研修は、中央研修（東京）とブロック研修（地方）に分けて開催されるもので、森林の現況を把握し、ICT等の最新技術により路網計画や地域の特性と森林状況を考慮した森林整備計画等を、成長産業化に資する構想へ反映できる技術力の養成等を目的としています。四国ブロック研修では中土佐町にある国有林と、その周辺の民有林を合わせた約1200haの演習地について、今後10年間の事業の構想を作成し、地元市町村長にプレゼンテーションするという想定で行いました。

初日は、外部講師などから演習地

等の説明やQGIS、FRD（路網設計支援ソフトウェア）等のツールを使用しての路網計画の検討、「地域特性に応じた森づくりの構想」の講義を受講しました。



FRDで路線を計画

2日目は、演習地内において林況や周囲の状況把握を行い森林の機能を考察して、今後の森づくりをどのようにしていくのかを各班ごとに発表しました。その後、前日に検討し

た路網線形を現地の地形などを地質や外部講師からのアドバイスを受けながら遠望などを通じて路線の決定を行いました。

3日目は、前日までの演習等を基に、FRDやQGIS等を使用して路線を設計するとともに演習地の今後10年間の森林整備計画、木材生産計画及び路網計画を林業成長産業化構想として作成しました。



遠望から路線を確認

最終日は、各班から構想の発表があり、発表に対し、活発なディスカッションが行われました。各班とも発表直前まで良く話し合っなど、どの班も素晴らしい構想を作成することができました。



森づくり検討発表

今回の研修は、コロナ禍のため中央研修が動画視聴による講義になったことから、中央研修で出来なかったFRD等の操作演習を補講として行うなど、限られた日程の中でタイトなスケジュールとなりましたが、受講生からは「これまで担当として専門分野には携わったが一括して考えることはなかったので普段の仕事にも活かしていきたい」「県や事業体、国有林と立場の違う者が集まり色々な意見を聞くことができて良い機会になった」等の感想が聞かれるなど、有意義な研修となりました。

## 令和2年度技術力維持・向上対策研修を開催

〈森林技術・支援センター〉

令和2年度技術力維持・向上対策研修の四国ブロック研修を11月11日～13日までの3日間の日程で、四国局大会議室で実施しました。

受講生は遠くは奈良県からの参加を含めて県職員4名及び町職員1名及び民間林業事業体7名、国有林4名の合計16名が受講しました。



島ノ川山現地実習

本研修は、森林総合監理士等のレベルの維持・向上のため、地域の特性等を踏まえた森林・林業の再生に向けた課題を設定し、現地での検討

を通して課題の背景と解決策を共有することを目的に実施するもので、四国ブロックは「地形に応じた効率的な架線と作業路網を組み合わせた」と題し、急峻な地形に応じた効率的な架線系と作業路網を描ける能力の習得を目指しました。



演習中

1日目は、(株)サイプレス・スナダヤの砂田和之社長から、大型製材工場の現状と課題について、現在の木材需要などの動向やC・L・Tの現在

の状況と今後について動画等による説明がありました。次に、吉良康資源活用課長から、集材架線システムや局駐車場内に架設した電動ミニ集材機の模型の説明の後、実際に国有林で事業を実施している箇所の集材架線・作業道による搬出の効率的な搬出方法について演習を行いました。



各班でスギ・ヒノキ採材実習

2日目は、島ノ川の列状間伐の事業地において、有利に販売できる技術の向上を目的とした採材研修を実施しました。高幡共販所の大川容平所長からは、「採材はこれが正しいというものはないが、現在、どのような物が売れているか情報を常に知っておく必要がある」等の講評をいた

だきました。次に、須崎地区森林組合の太郎田佑一業務主任による列状間伐の実施状況等の説明後、各班に分かれて、昨日検討した搬出方法について、作業道の取り付け位置の確認や、遠望から架線集材の先・元柱の位置等の確認をするなど、搬出方法の演習を行いました。

研修最終日は、前日に演習を行った現地を基に、搬出コスト計算や森林GISを活用して、架線や路網設計を行い、搬出系統図を完成させました。その成果を市町村等の林務担当者に向けた想定で発表し、意見交換を行いました。



演習中

この研修を通して、受講生からは「行政・民間の合同開催は非常に刺激になった」「現地実習において、講師等の生の声を聞くことができ、大変参考になった」「専門的な内容もあったが、実践的な研修であった」などの意見をいただきました。この意見は来年度以降の実践研修に反映させて、より良い研修にしていきたいと思えます。

今回、実践研修を実施するにあたり、須崎地区森林組合を始め各講師の皆様にも大なる御協力を賜りありがとうございました。

## 天然力を活用した針広混交林化施策に係る意見交換会の概要

〈局計画課〉

四国森林管理局が管理する国有林の約7割はスギやヒノキの人工林で、全国の国有林（人工林率約3割）と比べて人工林の割合が高くなっています。

当局では、この豊富な森林資源の循環利用を図るとともに、公益的機能の一層の発揮を図るため、多様で

健全な森林への誘導を進めることとしています。

その取組として、天然力を活用した森林づくりを検討するため、平成28年から現地勉強会を開催しています。



意見交換をしている様子

今年度は、スギ・ヒノキ人工林の間伐を伐採幅4m程度（通常の1伐2残の列状間伐を2伐4残で実施）とすることで、前生広葉樹の生育や広葉樹の侵入にどのような影響を与えるかについて検討することとしました。

具体的には、2種類の列状間伐（1伐2残、2伐4残）を実施した嶺北署一ノ谷国有林のスギ・ヒノキ人工林（林齢48年生、標高930〜1,

300m、緑の回廊の一部）を検討対象地として、11月5日に森林管理局、森林管理署（所）、森林総合研究所四国支所、高知県、いの町から総勢43名が参加し意見交換会を開催しました。

意見交換会では、これまでの研究成果に基づいた知見の紹介や施業などに関する意見が出されました。



現地を確認している様子

〈高標高地での広葉樹侵入に必要な伐採幅について〉

・幅約8メートルの作業道には、アカシデ、クマシデ、ミズメ等の広葉樹が見られたことから、この程度の伐採幅がないと広葉樹の侵入は難しいのではないかと。また、立

木の樹高程度の伐採幅があれば広葉樹が侵入しやすいことがこれまでの研究で明らかになっている。間伐ではこのような伐採幅を確保することは困難であり、間伐以外の伐採方法を検討すべき。

〈種子の供給源等について〉

・埋土種子の発芽は温度変化と水分が重要。広葉樹の種子の中には数十年土の中で休眠するものもある。風で飛んでくる種子として現地ではカエデやシデが見られた。これらの種子は数百メートル飛ぶこともあるが、多くは母樹の近くに生えることから、広葉樹の侵入には近くに母樹または広葉樹林があるのが望ましい。フナヤミズナラは種子（どんぐり）が落ちて転がる程度であり、種子は母樹から数十メートルの範囲でしか移動しない。・下層植生にササ類の有無も重要であり、明るくなるとササ類が繁茂し、その他の植生が生育しづらくなる。ササ類が多い箇所では地かきが効果的。

・地面に落葉等が堆積した状態も広葉樹の生育にはよくない。

今回の意見交換会の議論等を踏まえ、今後、計画課では誘導伐や択伐による針広混交林化など様々な方向から検討を進めるとともに、広葉樹の侵入状況を長期にわたって把握するため、2伐4残の列状間伐地におけるモニタリング方法を定め、各森林管理署に普及・定着させていく予定です。

更に、試験研究として過去に行われた針広混交林化の取組を整理するとともに、必要に応じ過去の試験地の現況調査も行っていくこととしています。



## 令和2年度国有林野等所 在市町村長有志協議会の 開催

〈徳島森林管理署〉  
〈嶺北森林管理署〉  
〈高知中部森林管理署〉

当誌11月号で紹介した、香川・愛媛・四万十・安芸の各地区の「国有林野等所 在市町村長有志協議会」（以下「有志協議会」という）に続き、今回は徳島及び嶺北・高知中部地区で実施した有志協議会について紹介します。



開会の挨拶（黒川三好市長）

### 【徳島有志協議会】

10月19日、徳島森林管理署管内の市町村から28名の出席の下有志協議

会を開催しました。

開会にあたり、議長の黒川征一三好市長から「昨年から森林経営管理制度がスタートしたが、各市町村においては森林・林業への担当者不足が課題となっている。また、近年、大きな災害も頻発していることから、今後も情報交換や訓練への継続的な支援をお願いしたい」と挨拶がありました。

各市町村からは、

○伐採・搬出の運搬費のコスト縮減に森林環境譲与税が使用できないか。

○新型コロナウイルス感染症により、木材価格の低迷の影響から木材生産を抑制することになり、一定期間休業を選択する事業体も出てくる。

○植栽した苗木がシカなどの食害を受け、定植させることが難しい。また、防護ネットなどの対策が行われているが、維持・管理などの負担が大きいことから、対策を今後検討していく。

○契約期間満了が迫った官行造林の取扱について、今後どのようにしていくのか。

などの意見が出され、局・署及び徳島県の担当者が考え方を示すなど、有意義な意見交換の場となりました。

### 【嶺北・高知中部有志協議会】

10月22日、嶺北森林管理署及び高知中部森林管理署管内の市町村から31名の出席の下、有志協議会を局で開催しました。

開会にあたり、議長の和田知士大川村長から「林業を取り巻く環境は依然として厳しい中、国と市町村で意見交換をできる貴重な場でもあり、活発なご意見をよろしくお願ひします」と挨拶がありました。

各市町村からは、

○新たな取組である森林経営管理制度の運用・実施にあたり、担当者の森林・林業に関する知見・ノウハウが少ないのが課題である。

○少子高齢化に伴い森林整備ができない所有者の増加が見込まれる中、森林環境譲与税の重要性が高まること予想されるため、市町村への交付額の増額をお願いしたい。

○シカなどの有害鳥獣駆除を行う狩猟者の育成が課題となっている。

○実際の森林施業の現地見学会や

CT技術の勉強会など、知識習得の機会を増やして頂きたい。  
 などの意見がありました。  
 この中で、市町村の担当職員の育成などに関する意見も多く聞かれました。



会議の様子

引き続き、地元の森林管理署や森林管理局が、各県・関係機関等と連携し、国有林のフィールドを活用した森林経営に関する研修会や技術向上を目的とした現地検討会等を実施し、国有林としての役割を果たしていきたいと考えています。  
 また、本協議会で出された意見や要望については、今後開催される「四

国国有林野等所在市町村長有志連絡協議会」において、各地区の代表世話人である市町村長から発言いただき、意見交換と情報共有を図っていく予定です。

## シカ防護柵点検業務委託を実施

〈局森林整備課〉

四国森林管理局では、植え付け地に、シカ防護柵を設置して、植栽した苗木の防護を実施しています。

シカ防護柵は、支柱が傾いたり網が破損しやすく、点検と合わせて確実に修繕を行うことが大変重要であり、森林官、森林技術員等の職員による施設の巡視、点検、補修等の業務を定期的に行っています。

近年、新植地の増加に伴い設置箇所も年々増加していることから、局森林整備課では、管内17箇所、3万3千mのシカ防護柵点検業務を委託することとしました。

実施箇所は、植栽から5年以内の箇所、特に防護柵の被害が多い箇所等について実施することとしました。



破損した防護柵

点検は、設置箇所1箇所につき月2回の巡視を3ヶ月間です。主な点検項目は①シカ防護柵の損傷箇所の確認、状況記録、②簡易補修（傾いた支柱の復元、ロープの張替え、張り具合の調整、ネット破損箇所の補修）を行います。

ニホンジカによる被害については、駆除、捕獲等により年々個体数が減少しているものの食害被害は依然として深刻な問題となっております。



シカ防護柵



現在、造林地において単木保護やニホンジカ防護柵を設置していますが、施設の点検や補修等設置後の維持管理が課題となっており、今回の

シカ防護柵点検業務委託が設置後の維持管理の一躍を担うよう継続して取り組んでいきたいと考えております。

## 愛媛大学リカレントプログラム(山地災害防止論)で治山事業を説明

〈局治山課〉

10月13日、四国森林管理局は、愛媛大学農学部森林環境管理学リカレントプログラム「山地災害防止論」において、治山工事の現場説明を行いました。これは、平成26年に同大学と締結した「相互連携協定」に基づくもので、昨年は久万キャンパスでの講義や大洲市と内子町における現場説明を実施しており、今年で2年目となります。

当日は、社会人の参加も含めて7名が参加し、久万キャンパスにおいて治山事業の意義や目的などを説明した後、平成30年7月豪雨で被災した伊予市の国有林と、平成27年の秋雨前線豪雨で被災した東温市の民有林を愛媛県の協力を得て案内しま

した。



講義の様子（久万キャンパス）

現地では被災当時の状況、施設を設置する際の考え方のほか、緑化を通じて土砂の流出を防ぐ治山事業の特徴を説明しました。学生からは、ダム表面に木材を活用している理由や、被災原因と周辺森林との関連など、多くの質問が出されました。短い時間ではありましたが、治山事業について、より身近に感じていただく有意義な機会となりました。

近年、集中豪雨などにより大規模な山地災害が多発しています。当局では、今後とも、山地災害の防止に向けた取組を行ってまいります。



民有林の現場（愛媛県東温市）



国有林の現場（愛媛県伊予市）

## 「令和2年度生産性向上勉強会」を開催

〈局資源活用課〉

資源活用課では、平成29年度から作業日報の活用による工程管理の実践等を軸に、生産性向上を目的として請負事業体も参加する勉強会等を開催しています。

令和2年度は、10月27日に作業日報プログラムを一部改修し更なる生産性向上に向けて、勉強会を開催しました。

今回の勉強会では、改修した作業日報プログラムの説明と、令和2年1月30日に開催した「架線集材の自動化システム開発現地検討会」及び令和2年10月2日に開催した「チップパーによる枝条処理方法の勉強会」の報告を併せ、今後の取組について意見交換を行いました。

参加された請負事業者の方からは、「作業日報プログラムへの入力は手間がかかるためもっと簡単にできないか」「項目が細かく、もっとシンプルにしたほうがよい」などの意見がありました。また、「他の事業者から学ぶこともあるため、四国の事業



現地検討会等の報告

体のみならず他局の現場状況や生産性を比較してみたい」など積極的な意見が出た一方で、「様々な実証事業等の発想が良いが飛躍し過ぎている。現場まで反映されるのが遅くなるため段階を踏んで詰めていってほしい」「生産性が向上したからといって利益が上がることは限らない」と率直な言葉も頂きました。



作業日報プログラムの説明

当局では、このような意見も踏まえ、作業日報プログラムのみならず、様々な手法においてボトルネックを解消して生産性向上へ繋げ、更には「儲かる林業」へと展開できるように取り組んでまいります。



## 列状間伐の現地検討会を開催

〈嶺北森林管理署〉  
〈高知中部森林管理署〉

10月29日、民有林への列状間伐の普及を目的として吾川郡いの町桑瀬の国有林で列状間伐の現地検討会を開催しました。

検討会には、嶺北森林管理署及び高知中部森林管理署管内の市町村、森林組合、請負事業者及び高知県、四国森林管理局・署等を含め66名が参加しました。

当日は、福吉修二嶺北署長の挨拶の後、嶺北署の内田雅巳総括森林整備官から事業概要及び列状間伐のメリットや列状間伐の方法、高知中部署東野信幸総括森林整備官からは頑丈で簡易な森林作業道作設の要点などの説明を行いました。



その後、事業実施者である(株)高知官材による、作業手順の説明と伐倒・集材の実演が行われました。

参加者からは、

- ① 列状間伐の方法はどのように使い分けるのか。
- ② 列状間伐と定性間伐で歩掛はどの程度違うのか。
- ③ 列状間伐は搬出単価は下がり、作業効率は上がることのだが、おおよその収支を示していただけたらよかった。
- ④ 優良木と不良木を仕分けせずに間伐するが、造材する場合に仕分けが必要になるのか。
- ⑤ 1回目の列状間伐の実施以降、2回目の間伐等の手入れの仕方(管理)はどう考えているのか。
- ⑥ 風倒木などの気象害を受けやすいのではないか。
- ⑦ 今回配付された資料もよかった



意見交換の様子

が、今後も林業に関して経験の少ない者にも見やすく分かりやすい資料作りをお願いしたい。

⑧生産性と安全性から列状間伐を推進していきたい。

⑨列状間伐は民有林ではあまり普及していない。要因として何が考えられるか。

⑩森林所有者の意向や、現場の条件が合う場合は進めていきたい。など、多くの質問や意見が出されました。



ドローンで撮影した列状間伐箇所



伐倒・集材の実演

今回は市町村からの参加が増え列状間伐への関心が高まっていると思われまます。今後も現地検討会の開催

を希望する意見も寄せられるなど、民有林での普及に向けては多くの課題がありますが、今後の検討会の方向性や必要性が再確認できた有意義な検討会となりました。

### 刃物の取扱い研修を実施

〈四万十森林管理署〉

四万十森林管理署では、近年、刃物の取扱いに起因する災害事例が多発している状況を踏まえ、手工具の安全作業に関する知識を深めることを目的に、若手職員を対象とした、刃物の取扱い研修を11月12日に実施しました。

当日は、黒潮町の浮鞭森林事務所において、新規採用者2名を含む若手職員7名を対象に、小松浩地域技術官と林美樹也森林官の2名の講師による鉋の研ぎ方の指導と、各自で鉋の研磨を行いました。これまでほとんど鉋の研磨の経験のない職員もあり、刃こぼれしている自分の鉋を砥石を使い分けながら、刃全体が平らになるまで研磨を行いました。その後、入野松原内の国有林に場所を移し、鉋や鋸による安全な作業につ

いて指導を受け、灌木の除去やつる切り作業を行いました。

全体を通して3時間ほどの研修の中で、参加した職員からは、「これまで家庭で包丁を研いだことはあったが、上手に研げないこともあった。上手く研ぐコツを教えてもらえた」といった感想がありました。

指導にあたった地域技術官からは、「よく切れる刃物を使うことで、無駄な力が入ることなく疲れずに作業ができる。それにより手元が狂うことも減り、災害の減少につながる。そのことを意識してほしい」との話がありました。実際に体感した若手職員の技術向上を図ることができた研修となりました。



鉋研ぎの実習の様子

## 八面山で登山体験

〔四万十川森林ふれあい推進センター〕

四万十川の支流で黒尊川源流域の森林である八面山や吊尾根の天然林は、野生生物やシイ・カシ林からミミツガ林、ブナ林への植生の移り変わりなどつばさに観察出来る良いフィールドです。

10月15日に愛媛県松野町立松野西小学校4年生21名、10月23日に四万十市立西土佐中学校の2年生17名を対象に八面山登山体験学習を実施しました。

当日は、登山口を出発し歩道沿いの樹木や草花、一ホンシカ食害などの学習をしながら約50分かけて八面山山頂(1,165m)に到着しました。

山頂では、遠望できる高知県と愛媛県の県境や鬼ヶ城山系の山々や、四万十川の説明をしました。四万十川の説明では、四万十川の支流の黒尊川や目黒川の源流点が近くにあることや

高知県の調査によると降雨時期を除いた黒尊川の清流度(水平方向の透明性)は、20年間にわたり14mを超えていて、多様な水生動物の生息が確認されており、源流域の森林が清流を

育んでいることを伝えました。

その後、八面山吊尾根のブナ天然林において、「森林のはたらき」などを説明した後、自然散策やネイチャーゲームの「カモフラージュ」などをおこない秋の一日を楽しみました。

後日、西土佐中学校から参加された生徒の感想文をいただきましたので紹介します。

小学生

○学校での事前学習や山での学習で、シカのもたらす被害がとても多いことがわかりました。このため、いろいろな対策をしていることをはじめで知りました。

○前まで知らなかった山のこと、動物たちのこと、山は人間の手入れが必要なことなど貴重な経験になりました。今回の体験を通して山登りはとても楽しいなと思いました。他の山にも登ってみたいです。

小学生

この森林教室で、実際にブナやケヤキ、ミズメの木肌に触れて樹皮の匂いを嗅いだり、森林の土や落ち葉に触れたり、気圧の変化を体験したり、周囲から聞こえてくるわずかな

音に耳をすませて聞きとることなどの体感を通して、児童生徒の自然や森林への興味・関心が深まったと実感しました。



10月23日、西土佐中学校2年生、下山経由の大久保山山頂(1,158m)にてハイポーズ



10月15日、松野西小学校4年生、ブナ天然林でカモフラージュの様子



10月23日、西土佐中学校2年生、木漏れ日キャッチの様子



10月16日、西土佐中学校で登山体験前の事前学習の様子

## 旧西ヶ方にしがほう小学校でクリスマスツリーの置物作り

〈四万十川森林ふれあい推進センター〉

四万十市立西土佐小学校から「ふれあいセンター」での木工体験を通して西ヶ方にしがほう地域に親しみをもちたい」との要望があり、生活の教育と地域発見に出かけよう」と題して、11月18日に1年生7名が旧西ヶ方小学校で大王松の松ぼっくりをクリスマスツリーに見立てた置物作りをしました。

児童達は、サンタクロースやトナカイ、雪だるまや教会等に切り抜いたファルカタ材（桐板の代用品）に色ぬりをした後、接着剤でスギの台座に貼り付け、クリスマスツリーに見立てた松ぼっくりには木の実・木片などの自然素材やビーズ等を装飾して作品を完成させました。

最後に、児童達から「西土佐にはどんな動物が何種類いますか」などの質問がありました。また、「みんな今日はどうだった」と尋ねると、「スギ板のいい香りがします」「沢山さわパーツが選べて頭の中で想像しながら作れたのでとっても楽しかったです」と答えていました。

今回の木工体験を通して、木のもつ温もりと素材としての木材の良さを十分に感じてもらえたものと思います。



クリスマスツリーの置物完成したよ



製作の様子



作品



現場からの便り

# 紅葉ばえる別府峡より



高知中部森林管理署 別府森林事務所

森林官 越智 洋

高知中部森林管理署別府森林事務所は、高知県中部の香美市物部町(旧物部村)に所在し、香美市役所物部支所(物部町大栃)から車で約25分、物部川沿いを上った場所にあります。



別府峡の紅葉

管内の別府地区は、秋口には山が紅葉に染まり、10月～11月に紅葉狩りを楽しむことができます。今年は何年以上に、色鮮やかに美しく紅く染まりました。その関係もあり、紅葉シーズンのみ開店するお食事処「もみじ茶屋」は、週末には多くの観光客が訪れ賑わっていました。「もみじ

茶屋」では、アメゴの塩焼き・田舎そば・そば饅頭等、別府ならではの料理を堪能することができます。

当事務所は、物部川流域の国有林約4850haを管理しています。別府山国有林には、緑の回廊や鳥獣保護区、保健保安林に指定されている森林が数多くあります。一方で三嶺に向かう国有林には、ニホンジカによる樹皮の食害が多数見られます。当事務所では、ニホンジカによる食害を防ぐため「三嶺の森をまもるみんなの会」等のボランティア団体と協力して防護ネットや単木保護シートを施しています。また、石立山には緑の回廊や保健保安林があり、毎年多くの登山客が登山に訪れます。石立山から約450m下方に位置する竜頭山は、絶滅危惧種のツキノワグマが生息している地域で、毎年特定の領域で子づくりをしています。また、収穫期を迎えている森林で

は、立木販売や丸太の生産事業を実施していますが、そのための事前の調査や監督業務のほか、林道や境界の保全管理業務等に、森林官と森林技術員2名の体制で取り組んでいます。



単木保護の状況

昭和50年代には1事業所、1貯木場、2担当区があり、50名を超える職員が働いていました。他の森林事務所でも同様のことが言えますが、現場を知る職員が減少していく中で今後は、境界巡視や林況調査等にドローンを活用するなど、ICT化を推進し業務の効率化に努める必要があると考えます。

私は、これまでの経験に加えIC

Tなどの新たな技術を取り入れることで、引き続き国民の森林を守っていききたいと考えています。



三嶺の山頂目前



筆者 中央